慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Hirschの解釈学の方法論的意義
Sub Title	Methodological significance of interpretive theory of Hirsh
Author	松尾, 洋治(Matsuo, Yoji)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2008
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.51, No.4 (2008. 10) ,p.225- 243
JaLC DOI	
Abstract	本稿では，方法論的二元論とそれに伴う懐疑主義が多勢を占める解釈学にあって，テストを実現し，解釈の妥当性を追求しようとするHirschの解釈学理論を取り上げ，それが従来の解釈学とは異なり，どのように構築されているのかを検討した。こうした分析を通じて，Hirschの解釈学から，マーケティング研究における解釈学的アプローチに対する方法論的な含意を抽出した。
Notes	樫原正勝教授退官記念号 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20081000-0225

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第51巻第4号
2008年10月

2008年10月14日掲載承認

Hirsch の解釈学の方法論的意義

松　尾　洋　治

＜要　　約＞
本稿では，方法論的二元論とそれに伴う懐疑主義が多勢を占める解釈学にあって，テストを実現し，解釈の妥当性を追求しようとする Hirsch の解釈学理論を取り上げ，それが従来の解釈学とは異なり，どのように構築されているのかを検討した。こうした分析を通じて，Hirsch の解釈学から，マーケティング研究における解釈学的アプローチに対する方法論的な含意を抽出した。

＜キーワード＞
解釈学的アプローチ，Hirsch，意味論的自律，意味と意義，立証，蓋然性の判断，Popper，状況の論理，反証

1．問題の所在

筆者は，拙稿（[2005]；[2008]）の中で，1980年代初頭の消費者行動研究において登場した解釈学的アプローチにおける方法論的諸問題を指摘し，それを克服するための提言を行った。そこでは，主として，以下の点について論じた。(1) 解釈学的アプローチにおいては，主観的な解釈が生み出されるが，テストされないことが多く，テストを通じた解釈の妥当性の判断がなされないという問題（「解釈の妥当性の問題」）が指摘できること。(2) こうした問題は，W. Dilthey，S. Freud，H. G. Gadamer によって考案された「理解」の方法を採用することによって引き起こされていること。(3) K. R. Popper によって考案された「状況の論理」と呼ばれる「(社会科学的な) 説明」の方法は，解釈の主観性を極力排除し，解釈のテストを実現することを可能にすること。それゆえに，(4) マーケティング研究における解釈学的アプローチに対して，「解釈の妥当性の問題」を解決するために，「理解」の方法に代わって，Popper の「状況の論理」を採用すべきであるという方法の移行を提言した。

これまで，マーケティング研究における解釈学的アプローチにおいても，また解釈学自体においても，テストを通じて解釈の妥当性を判断する試みはあまり追求されてこなかったし，むしろ

等閑視されてきた。とくに解釈学の領域においては，伝統的に，「説明」や「テスト」に代表される自然科学的な方法を適用することに対して批判的な立場が採られることが多く，これらの方法が学科内に流入してくることへの拒否反応は未だ根強い。

ところが，方法論的二元論が圧倒的な多数派，または主流派を形成してきた解釈学の中にあって，従来とは異なる展開がにわかに起こり始めている。1960年代，Gadamer の解釈学の影響力の拡大に押されてあまり注目されてこなかったが，テストを通じて解釈の妥当性を判断しようとする試みが，アメリカの研究者 E. D. Hirsch, Jr. によってなされているのである。伝統的なドイツ解釈学的伝統はもちろんのこと，現象学や記号論，そして科学哲学など幅広い領域の知的成果を吸収した上で，Hirsch は，かつては水と油のように相容れない関係にあったテストを解釈学の中で実現しようとする。Hirsch によれば，「科学と人文科学の間に横たわるとさんざん論じられてきた亀裂など存在しない」のである（Hirsch［1967］, p.264.）。

自然科学的な方法の適用を拒む研究者が多勢を占める解釈学の中で，「テスト」を実現しようとする Hirsch の解釈学理論は，多くの学者にとっては異端児的な存在として受けとめられているようである[1)]。ところで，マーケティング研究（とりわけ，解釈学的アプローチの擁護者）における Hirsch 学説的な評価はどうかというと，高い関心を惹き付け，研究されている Gadamer と比べると，彼に対する注目度は低い。また，Hirsch の解釈学理論について言及している文献はいくつか散見されるものの，必ずしも十分な検討がなされておらず，体系的に位置づけられているとは言いがたい[2)]。

Hirsch に対する注目度や関心は別として，いま彼の解釈学理論を取り上げ，検討する価値はあると思われる。というのも，（現在，マーケティング研究の解釈学的アプローチが擁護している Gadamer や Dilthey，Freud の解釈学よりも）Hirsch の解釈学の方が，「解釈の妥当性の問題」に一定の解決をもたらす方法論的視座を与えているという意味で，消費者行動研究に貢献しうる可能性をもっていると思われるからである。それゆえに，本稿では，Hirsch の解釈学を取り上げ，解釈学伝統の中での位置づけを確認する。その上で，Dilthey や Gadamer の解釈学との違いを明らかにする。また，拙稿［2008］において，同じく解釈学においても解釈の批判的吟味を提案する Popper を紹介したが，Popper の社会科学方法論と Hirsch の解釈学的理論はどのような関係にあるのか，これはたいへん興味深い問題でもあるので，併せて検討しておきたい。その上で，Hirsch がマーケティング研究における解釈学的アプローチもたらす方法論的意義はどのようなものかを探っていく。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では，Hirsch に最も大きな知的影響を与えている伝統的なドイツ解釈学の理論的展開をレビューした上で，研究の出発点ともいうべき彼の問題状況を再構成する。第 3 節では，Hirsch の解釈学理論を概観し，その全体像を明らかにしていく。そして第 4 節において，他の Dikthey や Gadamer との比較を通して，Hirsch の解釈学理論の特

1） F.Lentricchia［1980］は，「Hirsch は，合理主義の価値を擁護しても弁解がましい口調にならない理論家として，現代の批評理論の世界ではかなり珍しい部類に属している」と述べている（同訳，p.99.）。

2） Holbrook & O'Shaughnessy［1988］と Hirschman & Holbrook［1992］を参照のこと。

徴を抽出するとともに，Popper の社会科学方法論との関係についても言及する。こうした議論を踏まえた上で，最後に，Hirsch の解釈学の方法論的な含意を引き出していく。

2．ドイツの解釈学的伝統と Hirsch の知的問題状況

伝統的に，解釈学は，人間・社会・歴史に関する書物一般（テクスト）の内容を把握する学問であるといわれる[3]。Hirsch は，著書『*Validity in Interpretation*』（1967[4]）の序文の中で，解釈学の理論構築に取り組む目的について，次のような明快な口調で述べている。

> 解釈学的な懐疑論がもたらす広範的な含意は，その支持者によって常に見逃されてきた。真正な知識を主張するあらゆる解釈学的な一般原理の正当性がついには危機に瀕している。Dilthey が考えたように，あらゆる人文科学はテクスト解釈を基盤の上に成立するという理由から，妥当な解釈学は，これらの研究の中で行われる一連の推論の妥当性にとって極めて重要になるであろう。科学であれ，解釈学であれ，真正な学科の理論的な目的は真理を獲得することであり，その実践的な目的は真理がおそらくは獲得されていることを承認することである。従って，真正な学科の実践的目的は合意である――つまり，一組の結論が他のものよりも正しいだろうという確固たる基礎に基づいた承認を勝ち取ることである――。正確に言えば，このことが妥当な解釈学の目標である。その目標は無駄なものとして片付けられるべきではない。なぜなら，解釈学においては，その結論が多義的で，不確実であることがしばしば問題になっているからである（V.I., pp. vii-ix.）。

この引用の中では，解釈学では解釈の妥当性を放棄する懐疑論が蔓延しており，真理を追求する試みが危機に瀕していること，及び，（他の科学と同様に）解釈学は真理を追求する学科であり，そのための方法が必要であるという彼の見解が端的に表わされている。では，なぜ解釈学においてはこのような懐疑論が影響力を持ち，広がったのであろうか。この点を確認しておくことは，彼の解釈学理論をよりよく理解するためにも，決して無駄ではないと思われる。Hirsch は，現代の解釈学に最も大きな影響力を与えた Gadamer の解釈学の中にその主たる原因を見出してい

3）昨今では，書物一般だけでなく，実際の社会・文化現象をテクストとみなし，解釈しようとする動向が現れている。例えば，異文化の慣習を解読しようとする C. Geertz の文化人類学や，あるいはファッション，モード，流行などを記号として捉え，その意味を読み解こうとする R. Barthes や J. Baudrillard に代表される文化記号論の流れである。これらは広義の解釈学とみなされている。

　ところで，マーケティング研究における解釈学的アプローチの諸研究もまた，実在の消費現象を解読されるべきテクストと見立てることで，記述主体の事例研究を行い，その重要性を説いたのであった。この特称的な事象の分析は，依然として理論化が進展を見せない消費者行動研究の中にあって，意義のある貴重な研究動向であることは疑いえない。他方で，テクスト分析と称して採用される「理解」の方法に関しては問題がある。Dilthey や Gadamer に依拠すれば，当該アプローチの主観主義化，あるいは相対主義化は避けられないのであって，このことがマーケティング研究における解釈的研究の存在価値を著しく減じさせてしまっているのである。この点については，拙稿［2005］，［2008］を参照のこと。

4）便宜上，以下では，Hirsch からの引用を（V.I.）と略記する。

る。

一口に解釈学といっても数多くの研究潮流があるが，中でもGadamerの解釈学は，19世紀前半以降，F. SchleiermacherからW. Dilthey，そしてM. Heideggerといった研究者によって発展，継承されてきたドイツ解釈学の系譜に属している（図２－１）。

図２－１　伝統的なドイツ解釈学の系譜

19世紀前半～				
個別解釈学 ・聖書解釈学 ・文献解釈学 ・法解釈学	Schleiermacher （1768－1834）	Dilthey （1833－1911）	Heidegger （1889－1976）	Gadamer （1900－2002）

解釈学はもともと，聖書解釈学，文献解釈学，法解釈学など個々の領域の中で展開されてきた。本格的な発展をみせたのは，Schleiermacher以降，テクスト[5]の個別性を超えて，テクスト一般に関わる解釈の規則や方法を確立しようとする試みがなされてからである。彼の解釈学では「他者が自己了解している以上に，他者を了解する」という目標が掲げられ，どちらかといえば，テクストの「文法的な」解釈よりも，（テクストを作成した）著者の意図に迫り，理解しようとする側面が強調されていた（久米［1978］，pp.225-226）。そして，Schleiermacherの方法を受け継いだDiltheyにおいては，著者の意図を把握することが全面的に押し出され，「（解釈者の）生が（著者の）生それ自体を理解する」というテーゼの下に，テクストの読みを通じて，（解釈者が）過去の著者の「生」を共感する「追体験」と呼ばれる方法が考案された（丸山［1985］，pp.58-59.）。いずれの解釈学においても，提出された方法は，テクストの解釈の仕方に関わっており，テクストを生み出した著者の心理を共感的に把握するためのものであった。また，「理解」の方法としては，素朴で，かつ心理主義的な色彩が強かった。

その後，Heideggerを経由して，Gadamerは，従来の「理解」につきまとう心理主義を問題として取り上げ，その根底にあるロマン主義的な幻想を払拭しようとした。Gadamerは，現代のわれわれが，時空を超えて過去の人物の心の中に飛び込むことができると人々に確信させることは欺瞞であると主張している（Bernstein［1983］，同訳Ⅱ，p.274-275.）。また，そもそも著者の意図を把握するという無理難題を解釈学の目標に設定すること自体が間違っており，それゆえに，著者と切り離した形で，テクスト自体の解釈へ向かわなければならないと主張するのである。このように，テクストはそれを生み出した著者の意図や心理状態とは切り離された，独立した存在とみなすべきだという考え方は「意味論的自律（Semiotic Autonomy）」と呼ばれ，現在の解釈学理論や批評理論において広く受け入れられている[6][7]。

5）「テクスト」という用語がもつ外延は広く，文字によって構成されている文学作品（小説や詩）から，絵画や彫刻などといった作品まで含まれる。ドイツ解釈学においては，文学作品など「文字によって書かれた作品」という意味で用いられることが多い。本稿では，ドイツ解釈学に倣って，「テクスト」という用語を狭義の意味で用いることにする。

6）「意味論的自律」を本格的に理論的な形で定式化したのはフランスのP. Ricouerである（磯谷［1979］，↗

Hirsch は，意味論的自律によって，「理解」につきまとう心理主義的な色彩を払拭しようとし，テクスト自体を分析することの重要性を強調した Gadamer の主張は正当であると評価している[8)]。しかしながら，一方で，この意味論的自律が，以下で論じるような新たな事態を招くという。通常，われわれ読者は，著者を仮定した上で読みを進めていくのであり，著者に関する知識（著者が生きた年代的特徴や知的背景など）が，われわれの読みに，つまりテクストの意味を形成するおりに何らかの方向性を与える役割を果たす（富山［1979］，p.103.）。ところが，Gadamer においては，著者の存在が切り離されてしまっており，考慮されることはない。著者という参照枠組みはもはや利用されず，その代わりに，現代の読者に読みの全権が委ねられることになる。と同時に，読者による創造的な読みが強調され，テクストの意味は，決して汲み尽くすことのできない無限の可能性（多様性）をもつことになる（V.I., p.249. ; 富山［1979］，p.101[9)]）。こうして，解釈の歴史的な相対性を容認せざるをえず，そもそも解釈学において妥当な意味を獲得することができないという懐疑論的な帰結へと Gadamer は導かれていくのである。

Schleiermacher や Dilthey の解釈学以降，「理解」の方法を脱心理主義化しようとする試みは最も大きな課題として認識されていたが，Gadamer がテクストの「意味論的自律」を主張することによって，その問題に一定の解決が与えられたことは事実である。そして，多くの研究者が彼の成果を賞賛し，受け入れることとなった。ところが，実際には，Gadamer は意味の不確定性に直面し，妥当な解釈の追求を放棄せざるをえないのであり，皮肉にも，彼の解釈学が普及するとともに，学科内で懐疑論が広まるという事態を招いてしまったのである。

本節の冒頭で引用したように，解釈学において真理を追求する試みが放棄されているというの

↘ p.117.）。発話行為においては，話し手と聞き手が同じ対話状況にいるから，一般的に，言述（文）の意味がスムーズに伝達され，安定的なコミュニケーションが成立する。例えば，「あの屋根の上に猫がいる」という言述を聞き手が理解できるのは，屋根の上にいる猫（話し手が指示した対象）を容易に確認できる状況を共有しているからである。

ところが，こうした安定的なコミュニケーションは，言述が文字化される（文字として書かれる）とともに状況が一変する。Ricoeur によれば，テクストとしての言述は，（1）話し手ないし著者の意図，（2）予定された読者，（3）テクストが生み出された状況，から自律するという。例えば，（1）に関して言えば，先の「猫」の事例で示したように，発話（対話）において，話し手の意図と言述の意味は一致している。しかしながら，テクストの場合には，著者と読み手の関係は時代の隔たりがあり，両者の「対話状況は爆破されてしまっている」（Ricoeur［1976］，同訳，p.57）ために，著者の意図とテクストの意味は一致せず，テクストは著者の意図とは異なる，独自の意味をもつようになると考えられている。

7）「意味論的自律」は，Gadamer の解釈学だけでなく，ニュー・クリティシズムや神話批評，構造主義など，現代の解釈学においてもっとも広く受け入れられている見解であり，現代の解釈学一般を特徴づけている（V.I., p.246.）。

8）Hirsch は Gadamer の功績を次のように認めている。「Gadamer が心的過程のような信頼することができないものを同定する作業や，Schleiermacher や Dilthey における意味を拒否したことは正しい」（V.I., p.248.）。「私は Gadamer の主張の妥当性も認めている。それは，過去に関する生き生きとした現代的な理解を行うことは価値のあるものであることや，文化的所与の中にある差異性を主張することの正当性，そして過去と現代の間の態度を共有したいといった主張である。ここで望むべきことは，矛盾を犯さずに，そして論理的に必要な区別を放棄することなしに，これらの主張の真理性を保持することである」（V.I., p.255.）。

9）読者は，テクストの意味を現代のコンテクスト（言語規範や文化的所与，問題関心など）の下で解釈するが，こうしたコンテクストは時代とともに変化し続ける。それに伴って，テクストの意味も変化し続け，（時代を超えた）意味を確定することはできないからである。詳しくは，拙稿［2008］を参照のこと。

は，主として，以上のような事情によるのであり，Hirsch は，この問題に正面から取り組もうとするのである。すなわち，彼が自らの解釈学理論を構築し，展開していくのは，こうした懐疑論と決別するためであり，解釈学において長年にわたって忘れ去られてきた真理を探究する試みを回復することである。こうした問題状況が Hirsch の解釈学の出発点にある。

3．Hirsch の解釈学

Hirsch の解釈学理論は，(1) テクストの意味を規定することに始まり，(2) その意味を解釈するという行為とはどのようなものなのか，そして，最も注目されるべき点として (3) 解釈のテストがどのように行われるのか，を論証する形で展開されている。以下では，これらの 3 点に沿って，Hirsch の主張を概観していくことにする。

(1) テクストの意味の規定

前節で確認したように，Gadamer は「意味論的自律」論を通じて，テクストが著者の意図や思考，感情などといった心的領域から独立していることを主張した。しかし，いわゆるこの「著者無用」論によって，テクストの意味は，現代の読者の読みに還元され，自由気ままな解釈が横行し，その結果，懐疑論を生じさせることになった（丸山［1985］，p.204.）。このように，もしテクストの意味が変化するのであれば，読者は意見の一致や不一致に関して頭を悩ませる必要はなくなるであろうが，その代償として，解釈学は客観的な研究の基礎を欠くことになってしまう（V.I., p.214.）。Hirsch によれば，こうした問題を避ける道は，「テクストの意味」という場合の「意味」の概念に含まれている二義性を，まずは，はっきりと区別することにあるという（丸山，前掲書，pp.204-205.）。

Hirsch は，G. Frege の「意味（Sinn）」と「意義（Bedeutung）」という区分に倣って，テクストの意味を「意味（meaning）」と「意義（significance）」に区別する（V.I., p.211-212.）。「テクストの意味」とは，テクストそれ自体がもつ意味であり，一方の「テクストの意義」とは，テクストの意味が解釈者にもたらす含意のことである[10]。例えば，F. W. Nietzche の『ツァラトゥストラ』が，19世紀末に起きたドイツの青年運動（ユーゲント運動）に大きな影響を与え，当時の青年たちは，その作品の中に「生命の豊かさを，エロスの解放を，いっさいの生命の相互浸透を見た」としよう（三島［1996］，p.107.）。この場合でいう意味は，「テクストそれ自体がもつ意味」というよりはむしろ，「その作品が当時のドイツ青年にもたらす含意」のことを指している。それを Hirsch は「テクストの意義」と呼ぶ。

『ツァラトゥストラ』という同一の作品から，現代のわれわれは，当時のドイツの青年たちと同じ含意を引き出すとは限らないように，「テクストの意義」は，原理的には，無限に変化する。なぜなら，テクストの「意義」は，読み手のコンテクスト（関心，価値観など）に大幅に依存し，

10) 簡単に言えば，「テクストの意義」は「解釈者にとってのテクストの意味」と表現されるだろう（V.I., p.255.）。

またコンテクストそのものは時代とともに変化するからである。Gadamer の誤りは，「テクストの意味」と「意義」を混同し，「意味」を「意義」に還元してしまった点にある。そこで，Hirsch は，「意義」よりも先に，まずは「意味」を把握すること，すなわち，テクストから「意義」を引き出す前に，テクストそれ自体がもつ「意味」を解釈することが解釈学の仕事であると主張する[11)]。

それでは，Hirsch のいうテクストの意味とは具体的にどのようなものを指すのか，その内容が問われなければならない。彼はテクストの意味を以下のように規定している。それは，(1) 著者が意図した言葉の意味のことを指し，また，それは (2) 自己同一的（不変的）で，再現可能なものであるということ，である。まず，(1) に関して，テクストは著者によって生み出されたものであるという性質上，著者が意図した内容がそこに表現されていると考えるべきである。それゆえに，テクストの意味を著者と切り離して考察すべきではないと主張する（V.I., pp.215-216）。

当然のことながら，著者が意図した言語的内容の解読は，解釈者の手に委ねられるが，今度は (2) その意味が「自己同一的（不変的）なまま再現される」という。こうした発言は，一見すると，著者が当時意図していたことを，正確に，また確実に解釈することができるという Schleiermacher や Dilthey の主張にあたかも直結するように思える。しかし，Hirsch は「誰も著者の意味を確実さとともに確立することはできない」とはっきりと述べており，ロマン主義的な幻想を抱いていないことは明らかである（V.I., p.236.）[12)]。Hirsch の主張をより正確な形で理解するためにも，そうした誤解は避けられなければならない。

Hirsch は，テクストの意味の性質に関して，E. Husserl の「志向性」の概念を用いながら説明している。

> ある箱を見，次に目をつぶり，その後，再び目を開けて見るとき，２回目の観察において，私は以前に見たものと同じ箱を知覚できるだろう。しかし，同一の箱を知覚するけれども，見るというその２つの行為は明らかに異なっている――このケースにおいては時間的に異なっている。これと同種の帰結は，私が見るという行為を空間的に変更する場合にも引き出される。もし私が部屋の一方の側に行くか，あるいは椅子の上に立てば，私が実際に「見る」ものは私の視点の変化に伴って変わる。にもかかわらず，私は依然として同じ箱を「知覚している」。依然として見ているものが同一であることを理解するのである。というのも，もしそのことを私が理解していなかったら，どのようにして思い出しているなどと主張するこ

11）「意味」と「意義」の区別に加えて，Hisch は「解釈（interpretation）」と「批評（ctiticism）」という作業を区別している。「解釈」は「テクストの意味」を把握することであり，「批評」は「テクストの意義」に関わる作業である。Hirsch は「解釈」と「批評」を区別した上で，主として，前者に関わる理論を展開しようとするが，ここで注意すべき点は，彼は「批評」が解釈学の仕事ではないとか，両者が完全に分離できると主張しているわけではない，ということである。「解釈が批評から分離して行われるべきだと論じるつもりはない。単に，意味やテクストの意味を解釈するという特殊な問題と対決するために，今は，批評を考慮の外に置いておくだけである」（V.I., p.213.）。

12）「著者の意味が再演されたり，されなかったりする理解というあらゆる行為において（いわんやそれらの全ての行為において）確実性を伴う可能性はないからである」（V.I., p.256.）。

とができるのだろうか（V.I., p.217.）。

この箱を知覚する（Husserl 流に言えば,「志向する」）という出来事には，主として 3 つの側面があるという。まず,「そこには，第 1 に，私によって知覚される対象があること，第 2 に，私によって行われる，その対象を知覚する行為があること，そして最後に，（物体の場合には）私の知覚作用とは独立して存在する対象があること」である（V.I., p.218.）。Husserl は前 2 者をそれぞれ「志向的対象」と「志向する行為」と呼んでいるが，この考え方を Hirsch は解釈学に適用しようとする。すなわち，（知覚された箱のように）自己同一性（不変性）をもつ「志向的対象」の位置に，テクストの言語的意味を置くのである（富山［1979］，p.106.）。

Hirsch は次のように述べている。「言語的な意味は特殊な志向対象にほかならないのであり，他の志向対象と同様に，それを『志向する』多くの，異なる行為に反して自己同一的なものにとどまる」（V.I., p.218.）。つまり，Hirsch は，読み手の多様な解釈行為が存在するけれども，それに対して，テクストの言語的な意味（著者の意味）は，変化しない分析対象として取り扱われるべきだと主張するのである。著者の意味は，正確に，あるいは確実に解釈される保証はどこにもないが，ともかく読者に解釈されるものとして存在すると仮定すべきだということである。それでは，著者の意図の下に表現された言語的内容の把握は，いかなる手続きによって可能になるのだろうか。

（2） テクストの解釈

テクストを解釈する一般規則や方法を導き出し，定式化しようとする試みは，これまでも（例えば，Schleiermacher や Dilthey に代表される）多くの研究者によってなされてきたが，彼らはその度に困難に直面し，挫折を味わってきた。この点に関して，Hirsch は，テクスト解釈を，解釈を生み出すプロセスと，それを批判し，テストするプロセスという 2 つの側面に分けた上で,「解釈という行為は，最初は，都合の良い（あるいは，誤った）推測であって，その推測に関わる方法などないし，また洞察を生み出すための規則も存在しない。解釈に関わる方法論的な活動が開始されるのは，われわれが自分の推測を吟味したり，批判し始めるときである」と述べている（V.I., p.203.）[13]。

解釈とは常に，自らの仮説を押し当てながらテクストに読み進めていき，（例えば，テクストの構成要素である）部分によって，その仮説が裏付けられる（あるいは，修正される），いわゆる解釈学的循環に従って進行する。この循環のプロセスに注目すれば，解釈とは，むしろ，推測をテクストに関わる証拠によって裏付けていく，絶えざる立証（validation）[14] のプロセスであることが分かる。解釈の妥当性が獲得されるのは，こうしたテストのプロセスを首尾よく通過したからで

13） この点については，同様に，次のように述べられている。「正確な解釈に関わる方法やモデルといったものは存在しないが，多くの技量と技能を必要とする立証という厳しい批判的プロセスはある」（V.I., p.206.）。

14）「立証（validation）」という訳語は，Ricoeur［1976］『解釈の理論――言述と意味の余剰――』（牧内勝訳）を参照した（p.134.）。

あって，正確な解釈を生み出すための「理解」の方法や心理学に基づいているからではない。そのような方法や心理学は存在しないし，また，それらの上に解釈学の体系的な方法を確立することもできないのである（V.I., p.170.）。

Hirsch は，解釈のプロセスをこのように 2 つに区分した上で，テストのプロセスの重要性を強調しているが，（テストについては次項で触れるとして）それでは，われわれが実際に解釈を行う際に，具体的に，どのようにテクストを読み進めていけばよいのか，また，実際の読解を導く手引きのようなものは全く存在しないのだろうか。この点について，Hirsch は，テストが実施される以前の解釈を予備的な推測（あるいは，先行理解や先行把握）と位置づけた上で，その推測を獲得する際に重要になることを，次のように述べている。

> われわれの先行理解は，その後の理解を形成するための漠然とした仮説であり，また理解は，先行理解に部分的に依存するので，テクストに関する明確な先行把握を獲得することは，解釈学における重要な問題である。それでは妥当な先行把握とはどのようなものなのか。率直に言えば，著者の意味を正確な形で，前もって把握することである。ところが，それはなんと満足のいかない答えであろうか。あらかじめ著者が意味することを知る術はないし，それゆえに，ひじょうに多くの可能性をもった予備的推測が成立するであろう。また，その中から正解を導出することができる見込みはほとんどない――明らかに，わずかな可能性しかないし，このことによって妥当な解釈の可能性に関する深刻な懐疑論が正当化されるようにも思える。
>
> しかしながら，その問題をより正確に定式化するならば，その可能性がないわけではない。到達不可能な著者の意図という用語について個人主義的な言い方をするなら，当該問題を不正確に表現してしまう。他者の言葉の意味の性質に関わる正確な予備的な推測を行う可能性は，文化的規範や習慣を通じて意味に設けられた制約によって飛躍的に高まる。単純な言語記号は，２人の人間に対して同一の意味を表示する。そのことが可能になるのは，そこで生じている意味が慣習によって制約されているからである（V.I., pp.261-262.）。

ここでは，テストされる前の解釈，すなわち予備的な推測が，著者の意図に方向付けられたものでなければならないこと，及び，著者の意図を直接的に把握することは不可能なので，彼がテクストを書く際に利用していた文化的規範や慣習を明らかにしていくことを通じて，間接的に再構成される必要があること，が述べられている。

さらに，Hirsch は，文化的規範や慣習に関して，より具体的な議論を行っている。著者は，テクストを書くために「言語的規範」を身につけ，様々な作品の「ジャンル」を学習することによって，意図した内容を読者に伝えようとする。「言語的規範」とは，F. de Saussure が「ラング」と呼ぶものに対応しており，当時の著者が依拠し，利用した基本的な言語規則のことである。また，「ジャンル」とは，作品を「形式張らない会話，軍の命令，科学論文，小説，叙情詩」などに区別するための分類概念のことである（V.I., p.222.）。

Hirsch は，とりわけ「ジャンル」という分類概念が，テクストの全体的な意味を規定する役割を果たしており，読者の解釈を大まかに方向付ける指針として役立つと考えている。それゆえに，著者が身につけた「言語的規範」とともに，著者が意図した「ジャンル」を学習することを通じて，テクストの意味内容を解釈していく必要があると主張するのである。

> 予備的な推測や先行把握は，実際には，当該テクストが属しているジャンルに関するものであり，さらに「妥当な先行把握の本質は何か」という疑問の最も適切な形は「そのテクストが属するジャンルは何か」である。事実，このことこそ解釈者がテクストに問うべき最も重要な疑問である。なぜなら，その答えは，意味の範囲や方向性とともに，その形や強調点に即したテクストの理解法を暗に示しているからである（V.I., p.265.）。

以上のように，「言語的規範」や「ジャンル」に関わる予備的な推測は，その後の，テクストに関する解釈や読みを大雑把に規定し，形成する役割をもつのである。しかしながら，導き出された解釈が，必ずしも妥当なものになるという保証はない。むしろ，それはわれわれの都合の良い推測に過ぎないのであって，今度は，関連するあらゆるデータに照らしてテストされる必要がある。

（3） 解釈のテスト

前項において，解釈をテストすることが，その妥当性を判断するための唯一の基礎となるという Hirsch の主張に言及したが，そのテストについて，彼は次のように言及している。

> 確実性を伴って著者の意味を確立することはできない。解釈者の目標とは，単純にこうである――すなわち，一方の読みが，他の読みよりももっともらしいことを示すことである。解釈学における立証とは，相対的な蓋然性（probability）を確認するプロセスである（V.I., p.236.）。

また，具体的な解釈のテストの方法としては，「正当性（legitimacy）」，「一致性（correspondance）」，「包括的な妥当性（generic appropriateness）」，そして「蓋然性または一貫性（coherence）」と呼ばれる 4 つの基準が利用される。それら 4 つのうち，「正当性」，「一致性」，「包括的な妥当性」は予備的な基準として位置づけられており[15]，「一貫性」の基準が，より良い解釈とそうでない解釈と選別することおいて最も決定的な役割を果たすという。「一貫性」とは，後で詳しく説明するが，「引き合いに出された著者のコンテクストと，提出された解釈が一貫しているかどうか」を判断

15）「正当性」とは，著者が用いた言語規則（ラング）を引き合いに出しながら，テクストの読みがもっともらしいか判断することである。「一致性」では，読みがテクスト内の部分を説明しうるかどうかが判断される。「包括的な妥当性」では，著者のジャンルに照らし合わせて，テクストの推測がもっともらしいかが判断される（V.I., p.236.）。

することである。この基準が最も重要視される理由は，しばしば複数の解釈が対立する状況というのは，そのほとんどが，他の３つの基準はうまく満たしているが，「一貫性」に関しては，複数の解釈の間で見解が分かれるというのが一般的なケースだからである。

複数の解釈が対立する状況で,「一貫性」のテストがどのようになされるのかを理解するために，W. Wordsworth による詩「A Slumber Did My Spirit Seal」の難解な一節に関して提出された，C. Brooks と F. W. Bateson による２つの解釈の間で，妥当性の判断を下そうとする Hirsch の具体的な試みを，簡単に確認しておこう。以下の Wordsworth の詩の一節に対して，Brooks と Bateson は，ひじょうに対照的な解釈を提出している。これら対抗する２つの解釈の中から，Hirsch はより妥当だと思われる解釈を選択しようとするのである。

恋のまどろみ　わが心を包みぬ。
われに人の世の懸念なかりき。
乙女は地上の歳日の
触手も覚えぬものとなりぬ。

いまや乙女は動かず，動けず，
聞くことも見ることもなく
大地の日々の運行に従いて
めぐる，岩石と共に木々と共に。

この一節から，Brooks は，自然の壮大なプロセスの中に巻き込まれて，ぐったりと横たわる少女の描写が用いられることから，この詩では，人生に関する肯定的な暗示がすべて否定されていることを見出し，一方の Bateson は，生きている少女と死んでいる少女の対比が，永遠の生命に関する最終的な絶対的な肯定によって克服されていることを引き出した。より簡単に言えば，Brooks は，人間の死や人生の否定的な側面に注目し，反対に，Bateson は，人生とその肯定的な側面に注目した解釈を導き出している。[16)]

16）　参考までに，２人の解釈を取り上げておこう。最初が Brooks の解釈であり，２つ目が Bateson の解釈である（V.I., p.228.）。

［その詩は］，今では動かなくなった最愛の人に対する恋人の苦悩する心の様子について――完全に，惨めにぐったりとした彼女の様子に対する彼の反応について――示唆しようと試みている…もちろん，その効果の一部は，安らかな物体に関する描写ではなく，その物体の周りを何か他のものがぐるぐると回っていることによって，死が鋭く示唆されているという事実による。しかし，そこには効果を与えている，別の重要なものがある。それは，特定の場所に拘束されたままの木のような物，あるいは，岩や石のように全く生命のないものを含む森羅万象の喧騒へと少女が戻っていくという感覚である…［彼女は］，時間の尺度となり，それを刻む地球の空虚な回転の中に否応なく巻き込まれることになる。その最も力強く，すさまじい描写の中で，彼女は地上の時間によって触れられ，それに包まれることになる。

その詩が残している最終的な印象は，２つの対照的な雰囲気ではなく，最後の２行の汎神論的な荘厳さの中↗

こうした複数の競合仮説が存在する状況に対して，Hirsch は「一貫性による立証は，読みが一貫していることの根拠を立証することを含意している。すなわち，引き合いに出されたコンテクストが，最も信頼できるコンテクストであることを立証する必要がある。その後でのみ，立証されたコンテクストとの関連の中で，一方の読みが，他のものよりも一貫していると判断することができるのである」と主張している（V.I., p.238.）。ここでいうコンテクストとは，「著者の『論理』，態度，文化的な所与，著者の世界観」（V.I., p.242.）のことである。立証のプロセスでは，これら再構成された著者のコンテクストと，解釈が一貫しているかどうかが問われ，判断されることになる。

Hirsch は，Wordsworth が先の詩を書いた1799年に特徴的な態度として，いくぶん「汎神論的（pantheistic）[17]」であったことを指摘した上で，それゆえに Wordsworth が，木や石などを（単に動きのない物体ではなく）ひじょうに生命に満ち溢れていたものとして，それらを自然という不朽の生命の一部とみなしていたこと，そして，人間の肉体的な死は，そうした自然の「永劫回帰（revolving immorality）」へ新たに加わるすることだと考えていたと推測する。従って，当時の Wordsworth に特徴的な態度に関する証拠に基づけば，死の否定的な側面を強調する Brooks の読みよりも，その肯定的な側面を強調した Bateson の読みの方がいくらか確からしいと判断されると，Hirsch は結論づけるのである（V.I., pp.239–240.）。

もちろん，Bateson の読みが妥当であるという判断が誤っているという可能性は依然としてありうると，Hirsch は主張する。例えば，Wordsworth とは異なって，態度があまり一貫していないような著者の場合には，彼の特徴的な態度をある特定の詩へと適用することが困難になることもあるだろうし，また，現在では知られていない証拠が発見されることによって，従来とは異なる著者の態度が明らかにされることも考えられるからである。ただ，そうした著者の態度に関する新たな解釈が登場するまでは，Bateson の解釈はより確からしいと判断を下すことは可能であると主張するのである（V.I., p.240.）。

4．解釈学的アプローチに対する Hirsch の方法論的含意

以上，Hirsch の解釈学理論を概観してきたが，以下で，従来のドイツ解釈学との違い示すことによって，まずは，その特徴を要約しておきたい。ここで Hirsch の解釈学と比較する対象として取り上げるのは，Dilthey と Gadamer の解釈学である（図 4－1 参照）。ドイツ解釈学の初期段階において，Dilthey は，テクスト一般に関わる「理解」の方法を定式化しようとした。そこ

↘で，クライマックスへと高められていくという唯一の雰囲気なのである…この詩の中では，生きた Lucy が自然の壮大なプロセスの中に巻き込まれていく死んだ Lucy に対置されている。われわれはその詩を満足いくものと判断した。その理由は，その最後の 2 行の中で，2 つの人生観や社会的態度を調停することに成功しているからである。Lucy は死んでしまっているからこそ，実際には生きているのである。なぜなら，彼女は今では自然の生命の一部となり，人間という「物体」ではないからである。

17）宇宙全体がそのまま神であるという自然崇拝的な考え方のことで，万有神論ともいう（廣松他［1998］，p.1295.）。

で提出されたのは，テクストを読むことを通じて，著者の「生」を共感的に把握していく「追体験」の方法であった。Gadamer がいみじくも指摘している通り，解釈者は著者のコンテクストを捨象し，（時代を超えて）著者の心理の中に飛び込むことなどできないのであり，「追体験型の理解」は，形態として，極めて素朴なものであった。Dilthey の解釈学においては，作品にはそれを生み出した制作者の精神や魂が表出しており，作品を理解するということは，そうした作品の本質を見抜くことであるという初歩的な論理が，その根底にあることを窺い知ることができる（小河原［1999］，pp.143-144.）[18]。

次に，Gadamer は「意味論的自律」を主張し，テクストを生み出した著者を分析の対象から外すことによって，「理解」につきまとう心理主義的な色彩を払拭しようとした。テクストは著者によって作成されるが，現代のわれわれが作品を解釈する時点では過去の著者は不在である。従って，テクストの意味を著者の意図や感情などと同一視することはできず，切り離さなければならない。これが「意味論的自律」によって主張されたことの核心であった。確かに，（著者ではなく）まずは作品を忠実に理解せよという Gadamer の主張は正当であるように思えるけれども，それが，いつのまにか作品の解釈にとって著者は無用の影であるという，過激な論説にすりかわってしまうのである（富山［1979］，p.100.）。こうしてテクストの意味の決定の全権が解釈者の手に委ねられ，自由気ままな解釈が横行するという結果を Gadamer は容認せざるを得ないのである[19]。

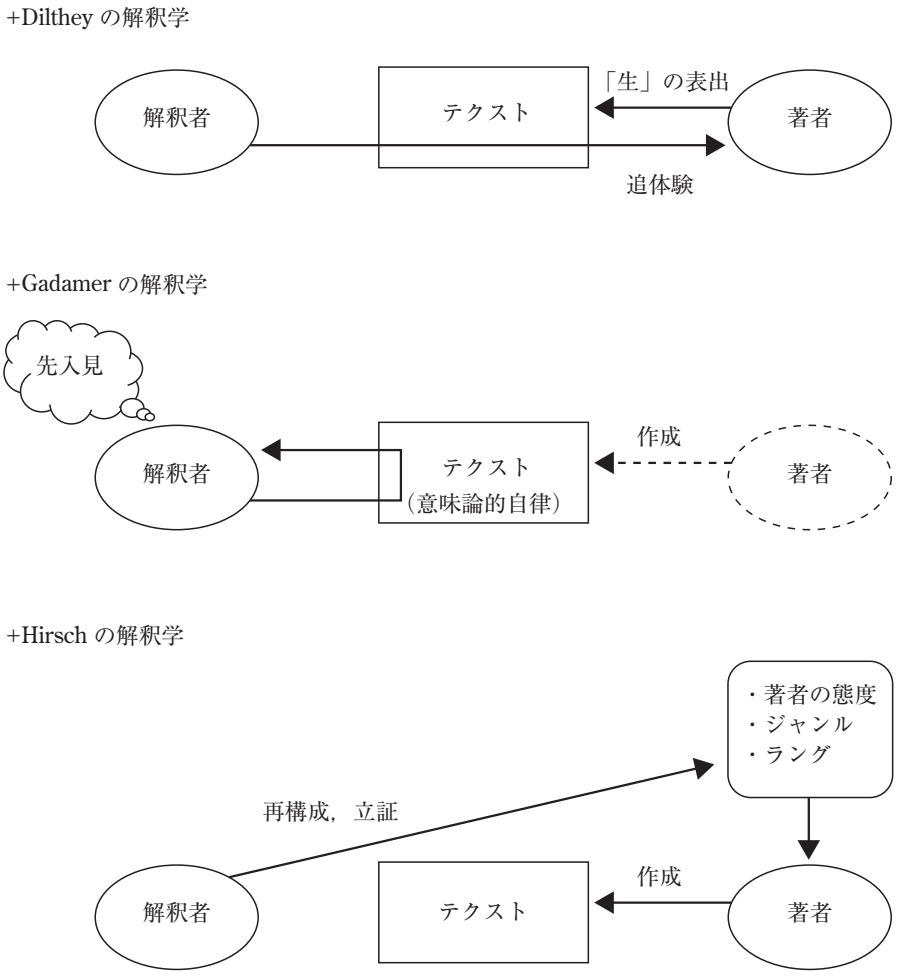
こうした Gadamer 流のテクストの自律論を解体するためには，自己完結しているはずの作品をそれ以外の何かとの相互関係の中に置くことが必要になってくるのだが，そこで，Hirsch は，まず（1）Gadamer によって不要とされた著者に注目し，分析の俎上へと再び呼び戻した。そして，当の著者が意図した言語的内容を把握することを，解釈学の目標として新たに設定するのである。それゆえに，（2）解釈は，テクストがどのような意図の下で書かれたのかに焦点を合わせながら，著者のテクスト作成活動を再構成し，辿る作業になる。意図されたテクストの意味は，著者が利用したジャンルや言語規範（ラング）を推測的に再構成する，あるいは，入手しうるあらゆる証拠を用いて立証することによって探られることになる。この作業は，Dilthey のように，テクストの読みから即座に著者の心理に迫ろうとする心理的再演とは一線を画している[20]。また，著者という存在が読者の読みを統制する役割をもつことから，解釈者による身勝手な解釈が制限されるという点で Gadamer とも異なる。

18）小河原［1999］では，こうした論理が，われわれの思考の中に深く根付いているばかりでなく，アカデミックな研究の様々な場面においても，姿かたちを変えながら，幾度となく現れていることが示されており，実に興味深い。

19）Gadamer の解釈学は「適用の解釈学」などと呼ばれるが，「適用」とは，まさに，テクストの内容を解釈者の状況に当てはめつつ理解することである。

20）「解釈者が著者の立場を仮定するとき，彼はその著者の志向作用を感情移入的に再演するが，しかしこの想像的な行為は意味を実現するためには必要であるけれども，意味とは区別されなければならない。テクストが著者の主観的な立場を表すことは決してない。解釈者は，テクストの意味を理解するために，ある主観的な立場を利用するだけである。もし解釈者が自己批判的な人間であるなら，利用する主観的立場がおそらくは著者のものであることを示すことによって自らの解釈を立証しようと試みるのである」（V.I., p.241.）。

図 4－1　Dilthey, Gadamer, Hirsch の解釈学



出典：筆者作成

そして，(3) 解釈はいつでもテストに晒される。テストのプロセスにおいては，とりわけ「一貫性」が最も重要な判断基準とされており，再構成された著者の態度とテクストの読みとの一貫性が問われ，妥当性についての判定が下される。解釈の妥当性は，解釈を生み出す方法によって獲得されるものではなく，厳格なテストを通過することによって獲得されるのである。このように Hirsch は，解釈の妥当性の合意を打ち立てるための基礎を，広く議論に開かれたテストに求めるのであり，この点が Dilthey や Gadamer との最も大きな相違点となる。[21)]

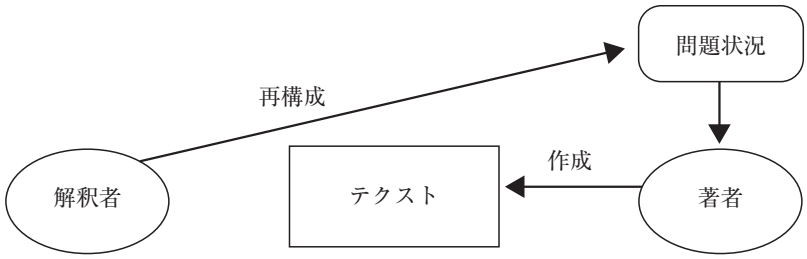
以上のような Hirsch の解釈学理論から方法論的含意を引き出す前に，（拙稿［2008］で取り上げた）同じく解釈学において自然科学的方法が適用されるべきだと主張する Popper の社会科学

21）　ただし，ドイツ解釈学の中でも，唯一 Schleiermacher においては，解釈をテストしようとうする試みが曖昧な形であるが示されていると Hirsch は指摘している（V.I.,pp. 204–206.）

方法論との関係性にも言及しておくことは有益であると思う。『*Validity in Interpretation*』の序文の中で，Hirsch は，知的影響を受けた主要 7 名の人物を挙げており，その中には Popper の名前が入っている。「知的な恩恵を正確な形で記録することはできないけれども，主として，私の基本的なアイデアは，Ferdinand de Saussure，Wilhelm Dilthey，Edmund Husserl，John Maynard Keynes，Karl Popper，Hans Reichenbach，そして Friedrich Schleiermacher から恩恵を受けている」（V.I., p.xi.）。Schleiermacher や Dilthey，Husserl，そして Saussure については著作の中で頻繁に言及されており，Hirsch の理論との影響関係を示すことは比較的容易である。ところが，Popper に関しては，（序文で名前が挙げられたきり）脚注の中で一度引用されているだけで，本文中ではほとんど言及されていない[22]。それゆえに，Hirsch と Popper の関係性を探るためには，両者の方法を比較・検討していくよりほかない。

Popper は，自然科学／社会科学，あるいは理論科学／歴史科学を問わず，演繹的な因果的説明を提供し，その説明をテストすることが科学の目標であると主張する（Popper［1957］，同訳，p.197; 堀越［1983］，p.104.）。社会科学においては，「状況の論理」と呼ばれる説明の方法によって解釈が構築されるということが Popper の主要なテーゼである。「状況の論理」とは，「推測的に，その行為者のおかれた問題状況の理想的な再構成を与え，その程度までその行為を『理解可能』（または『全面的に理解可能』）に，つまり，彼の見たがままの状況にふさわしいものにしようと試みること」，すなわち，行為者の行為が彼を取り巻く問題状況に対して適切になるような形で，彼の目に映ったままの状況を推測的に再構成することである（Popper［1972］，同訳，p.202.）。そして，この「状況の論理」が解釈学に適用されると，芸術作品を理解するために，それを制作した芸術家の問題状況を再構成する作業が行われる。この問題状況との関連の中で，どのように作品が生み出されたのかを理解することが重要になるのである（ibid., 同訳，p.203.）。

図 4－2　Popper の「状況の論理」



出典：筆者作成

解釈の構築の仕方に関して，Popper と Hirsch は驚くほど類似した議論をしている。一方では「問題状況」を再構成せよ，他方で「態度，ジャンル，ラング」を再構成せよ，と主張されているが，両者はともに，（あらゆる証拠に基づいて）著者の知的状況を再構成することの重要性を説き，また，

22）『V.I.』（p.206.）の脚注25を参照のこと。その一方で，「反証」について言及されている箇所はある（pp.180－181.）。

そのことを通じてテクストをよりよく理解することができると論じているのである。もちろん両者には相違点もある。Popperの「状況の論理」は，どちらかといえば，主として，科学史における歴史的理解（例えば, G. Galileiの潮の干満の理論の理解等）に用いられることが想定されており，芸術作品一般に関わる解釈の構築の仕方については，必ずしも十分に議論されているとはいえないからである。しかしながら，Hirschは，むしろ，この点に切り込み，理論を展開したと考える方が妥当であり，そうすると両者の相違点は「科学論文に関わる理解か」，あるいは「芸術に関わる理解か」という分析対象の違いこそあるものの，方法としてはひじょうに近接しているといえる。

それでは，テストに関してはどうであろうか。Popperは「推測と反駁の方法は，科学にあっても人文科学（解釈学）にあっても実行される」と述べている一方で，解釈学における反証は困難さを伴うのであり，自然科学で実施されているテストほど厳密な形で行われるわけではないことを認めている（ibid., 同訳，p.210. 括弧内は付加[23]）。他方，Hirschも似たような見解を述べている。

> 2つの解釈の間での選択を行う唯一の確かな方法は，それらのうちの一方が誤りであることを示すことである……（中略）……歴史科学においてそうした結果が達成されないのは，決定的な，反証データを思うように作り出せないからである。もしそうしたデータが既に知られているなら，2つの仮説が本格的に競合することはないだろう。もちろん，ときには，幸運にも決定的なデータが現れることはあるが，通常は，競合仮説の両方が反証されることはないし，またその証拠を説明する別の方法を求めて生き延びる。そのケースにおいて，反証の直接的な経路は閉ざされているから，われわれが有している証拠を基礎とした蓋然性の判断という手段を用いて進まなければならない（V.I. pp.180-181.）。

PopperもHirschもともに，（その重要性は認めながらも）解釈学においては，通常，厳密な意味での反証を行うことは困難を伴うことを認識している。ただし，Hirschは，この困難さを認めながらも，「蓋然性の判断」を足掛かりにして，反証に類似したテストは可能であると主張するのである。

「蓋然性の判断」とは「部分的に知っている事例がもつ未知の特性に関わる推測である」（V.I. p.184.）。例えば，18世紀の著者は，「wit」という言葉を「利口な当意即妙の受け答え（clever repartee）」ではなく，「知的な才（intelligent competence）」という意味をもたせるために用いていると推測できるのは，18世紀の他の著者が大抵の場合，後者の意味でその言葉を用いていること

23）Popper［1950］はこの点について，以下のように述べている。「歴史では，われわれの意のままになる事実はしばしば厳格に制限されており，われわれの欲するままに反復されたり補充されうるものではないからである。そして，そうした諸事実は前もって考えられていた観点に従って収集されているのであり，いわゆる歴史の『典拠』も，記録するに十分興味あると思われるような事実のみを記録しているにすぎず，従って一般に前もって考えられていた理論に適合するような事実しか収集していないであろう。そして，それ以上の事実は獲得されないのだから，この理論あるいは他の何らかの後続の理論をテストすることは原則として不可能であろう」（同訳，第Ⅱ部，pp.246-247.）。

を別の証拠によって知っているからであると，Hirsch は主張している。当該テクストの著者が実際にどちらの意味をもたせていたかを正確に知ることが依然として不可能であることに変わりない。しかし，現在入手可能なあらゆる証拠に基づいて，ある程度，どちらの解釈がもっともらしい（確からしい）かを推測的に判断することは可能であるということである。3 節 3 項で取り上げた，Wordsworth の詩に関して提出された Bateson と Brooks の解釈をテストするケースもこうした蓋然性の判断に基づいている。そこでも述べたように，その判断は推測であって，常に不確実性を伴うことは事実である。しかし，Ricoeur が指摘しているように，反証に類似したテストを実現することは可能であるように思えるし，むしろ，蓋然性の判断を通じて，Hirsch は Popper の方法を積極的に展開しようと試みている，といえるであろう。[24)]

以上のように Hirsch の解釈学理論を位置づけるならば，以下のような形で，マーケティング研究における解釈学的アプローチに対する方法論的含意を引き出すことができるだろう。拙稿［2008］で指摘した以外にも，解釈学という領域において，Popper と同じような形で，妥当な解釈を追求しようとする試みが Hirsch によって展開されていること，また，それは懐疑論や相対主義を乗り越える可能性をもっており，その重要性を認識する必要があるということ。そして最後に，マーケティング研究の解釈学的アプローチは，しばしば懐疑論や相対主義的な科学観が占めていると言われるが，そちらへなびかれるのではなく，それらをどうにか乗り越えようとする試みこそが重要であること。このことが Hirsch の著作から導出されるべき「意義（significance）」ではないだろうか。

5．おわりに

本稿では，以下の点を論じた。

（1）　マーケティング研究における解釈学的アプローチに「理解」の方法を提供している解釈学の領域において，懐疑論や相対主義と決別しようとする新たな動向が Hirsch によって展開され始めている。

（2）　Hirsch の解釈学理論の最も注目すべき点は，解釈学では長年にわたり拒まれてきた解釈をテストする自然科学的な方法が提出されていることである。

24）　Ricoeur は Hirsch のテストについて，次のように高く評価している。

> われわれの推測をテストする立証の手順について言えば，それらが，経験的実証の論理よりも，確率の論理の方に近い，とみる Hirsch の見解に賛同する。ある解釈の方が，われわれの知っていることに照らして確率性が高い，と示すことは，ある結論が真実である，と示すこととは別個の事柄である。したがって，当面の問題に関係する意味において，立証は，実証（verification）ではない……（中略）……立証の手続きには，Karl Popper が『科学的発見の論理』のなかで提案している反証の基準に類似した，無効の手順も含まれる。ここでは，反証の役目を，競合する解釈間の衝突が果たしてくれる。ある解釈は，確率性が高いばかりでなく，別の解釈と比較しても，一段と確率性が高いに違いない。その衝突に決着をつけるための相対的優越性の基準が存在するし，この基準は，主観的確率の論理から容易に派生できるものである（Ricoeur［1976］，同訳，p.135.）。

(3) Hirsch が提示している解釈に関わる実践的な技法，そしてテストの方法は，それぞれ Popper によって考案された「状況の論理」や「反証」に極めて類似している。また，Hirsch の試みは，解釈学の中で，Popper の社会科学方法論が具体的にどのように適用することができるのかを示そうとするものとして位置づけられる。

(4) 以上の点に鑑みて，マーケティング研究における解釈学的アプローチにおいては，こうした Hirsch の試みの重要性を認識し，現在，広く受け入れられている懐疑論や相対主義的な科学観を改めて問い直す必要があることを論証した。

本文中では詳しく述べることはできなかったが，これまで論じてきた Hirsch の試みに賛同する研究者もいる。解釈学にひじょうに深い造詣をもつフランスの哲学者 Ricoeur である。脚注24で引用した文章にも表されている通り，Hirsch のテストの試みは高く評価されている。Popper の社会科学方法論を解釈学において展開しようとする Hirsch の試みは，ここにきて徐々に援軍を獲得しつつあるのかもしれない。

参 考 文 献

Bernstein, R.J.［1983］, *Beyond Objectivism and Relativism : Science, Hermenentics, and Praxis, University of Pennsylvania Press.*（丸山高司・木岡伸天・品川哲彦・水谷雅彦訳『科学・解釈学・実践――客観主義と相対主義を超えてⅠ・Ⅱ』岩波書店，1990）.

Dilthey, W.［1900］, *Die Entstehung der Hermeneutik.*（久野昭訳，『解釈学の成立』以文社，1973）.

――――［1957］, *Die Entsteheung der Hermeneutik.*（瀬島豊［等］訳，「解釈学の成立」『解釈学の根本問題【現代哲学の根本問題】第７巻』晃洋書房，1978）.

Gadamer, H.G.［1960］, "*Aus : Wahrheit und Methode, Tübingen*, S.250-269, S.275-295" in : Pöggeler, H.O, Hermeneutische Philosophie : Nymphenburger Verlagshandlung GmbH., Munchen 1972.（瀬島豊［等］訳，「真理と方法」『解釈学の根本問題【現代哲学の根本問題】第７巻』晃洋書房，1978）.

廣松渉他編［1998］,『岩波　哲学・思想事典』岩波書店.

Hirsch, E.D.［1967］, *Validity in interpretation*, New Haven : Yale University Press.

Hirschman, E.C. and M.B.Holbrook［1992］, *Postmodern Consumer Research*, SAGE publications, Inc.

Holbrook, M.B. and J.O'Shaughnessy［1988］, "On the Scientific of Consumer Research and the Need for and Interpretive Approach to Studying Consumption Behavior", *Journal of Consumer Reserch*,15（Dec.）, pp.398-402..

堀越比呂志［1983］,「コトラーの概念拡張論の方法論的再吟味――マーケティングにおける理論と実践――」『三田商学研究』第26巻第２号，pp.94-114.

小河原誠［1999］,「形と魂（1）――解釈の哲学によせて――」『鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集（別冊）』.

久米博［1978］,『象徴の解釈学　リクールの哲学の構成と展開』新曜社.

――――［1979］,「テクストとは何か　解釈学の射程」『現代思想』1979年８月号，vol.7-10, pp.56-73., 青土社.

磯谷孝「解釈学と記号論」『現代思想』1979年８月号，vol.7-10, pp.111-123., 青土社.

Lentricchia, F.［1980］, *After The New Criticism*, The University of Chicago.（村山淳彦・福士久夫訳，『ニュー・クリティシズム以後の批評理論（上）・（下）』未来社，1993年）.

丸山高司［1985］,『人間科学の方法論争』勁草書房.

松尾洋治［2005］,「マーケティング研究における解釈的アプローチの方法論的背景」『三田商学研究』第48巻第２号，pp.129-155.

――――［2006］,「消費者行動研究史」『慶応商学論集』第19巻第１号，pp.1-32.

――――［2008］,「マーケティング研究における解釈的アプローチの方法論的問題とその克服」『三田商学研究』第50巻第６号，pp.239-262.

三島［1996］,「ニーチェ――力への意志のモルフォロギー――」『現代思想の源流――マルクス　フロイト　ニー

チェ　フッサール』講談社.
Popper, K.R［1950］, *The Open Society and its Enemies*, Princeton University Press, first publication in U.S.A.（小河原誠・内田詔夫訳『開かれた社会とその敵（第一部）・（第二部）』未来社，1980）
――――［1957］, *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul.（久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社，1961）.
――――［1959］, *The Logic of Scientific Discovery*, Harper Torchbooks, New York,（大内義一・森博共訳『科学的発見の論理（上）・（下）』恒星社厚生閣，1971-1972.）
――――［1963］, *Conjectures and Refutations*, The Growth of Scientific Knowledge, London, Routledge & Kegan Paul Ltd.,（藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁　科学的知識の発展』法政大学出版局，1980）.
――――［1967］, La Rationalité et le Statut du Principe de Rationalité, dans E.M.Claassen（éd.）, Les Fondements Philosophiques des Systémes Economiques,（Paris, 1967）.（水野博志訳「合理性と合理性の原理の規約」『福岡大学商学論叢』第30巻第１号，1985）
――――［1972］, *Objective Knowledge : An Evolutionary Approach*.（森博訳『客観的知識――進化論的アプローチ――』木鐸社，1974）.
――――［1983］, *Postscript to the Logic of Scientific Discovery*, edited by. W.Bartley, London:Routludge, 1982-83（小河原誠・蔭山泰之・篠沢研二訳『実在論と科学の目的（上）・（下）』岩波書店，2002）
――――［1984］, *Auf der Suche nach einer besseren Welt, Vorträge und Aufsätze aus dreißig Jahren*, Müchen:R.Piper,（小河原誠・蔭山泰之訳『よりよき世界を求めて』未来社，1995）.
Ricoeur, P.［1976］, *Interpretation Theory : Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press,（4th edition）.（牧内勝訳『解釈の理論――言述と意味の余剰――』ヨルダン社，1993）.
富山太佳夫［1979］,「作者の意図の再構成　受容の美学と解釈学」『現代思想』1979年８月号，vol.7-10, pp.100-110. 青土社.

［名古屋商科大学マーケティング学部専任講師］